

# 京鹿子

Editorial Department of the Journal  
100001 Beijing, China



4月号

豊 田 都 峰

心響集 その四

寒風の切り抜きと比叡鬼門護る

雪しづる峠や白き日つつみ

春寒に立つてはづれの二三本

春さむく土橋へ曲がる辻地蔵

日当たりて寒木村へあと半里

雪しづるひとすぢ茅葺きの昼



春寒の一響藪の中に立つ  
かたくりの花ひと日矢に開演す  
高志恋へば堅香子の丘風の立つ  
立ち尽くす枯芦伊吹を遠見して  
嵯峨野路の瀬音ひびきは春どなり  
付箋する梅一輪の青空に  
梅林にのみ日当れる元離宮  
野守なる老梅遠嶺低くして

—丸山佳子作品—

# 春愁

丸山佳子



髯  
剃つてみて春愁の顔を切る

春愁といへど縫ふ針意のまゝに

春愁の針娘ばかりのしづけさよ

春愁や立体映画味気なく

春宵のをんなのあくび見られけり

## 秀華採集

白砂を海となしけり福寿草

沼田巴字

盆栽の景ながら、「白砂を海」と認識した時の世界観は新年らしくてよい。「福寿草」は一段と黄色く輝く。

歳晩や磨き残しのある齡

鈴鹿けい子

齋つむ真つ正面に若狭富士

西村滋子

前句の「磨き残しのある」という年齢の把握の仕方は、根源的なものである。「歳晩」と響き合う。後句の風土性の認識にたつ把握が「齋つむ」という行いとこれまたこの上なく響き合っている。現代版「風土記」である。



近詠

## 二条城界限三句

鈴鹿 仁

三月の風のあしらふ大手門  
俵屋町米屋町とや春すずめ  
梅東風やみくじに託す親も子も  
野風呂忌や鬼面の猪口の酔はやし

鎌田政利氏追悼

句帳手に黄泉の橋辺のしぐれ虹



— 近 詠 —

## 漁始

和田 照海

真ん前は出会ひの海や漁始  
双風の競ひ揚がりや里日和  
一湾を統ぶるみさごへ初風げる  
綿津見の祠の幣の御慶かな  
父の死のその後狐訪はざりし



神麓集

日日好日 藤岡 紫水  
福笹の波が波押す宵えびす  
経文に応えこぞる火吉書掲げ  
噴出の影地に踊る春隣  
月光を浴びて影無し雪女郎  
臘梅の花ほつほつと日日好日

花旋つむじ 竹貫 示虹

花散るや造ぎゆくものに水と人  
道づれのひとりづつ欠け花に雨  
秘め箱に遠流の島のさくらがひ  
杖の歩の足もとへ来る花旋風  
京洛の花のはたてに逝かれし師

松田 都青

雪搔くや方程式を解く如く  
年末の何処に触れても金属音  
十二月八日に作る握り飯  
餅食むや切れない長さで伸びてゐる  
動かない冬の空には穴がない

影もまた己れの支へお元日  
北川 孝子  
初比叡瞬の目覚めの羽音かな  
年果つる追伸のやう雲流れ  
一徹を丁寧に生き年つまる  
冬ぬくし陰日向なき性持ちて

初鴉 丸井 巴水

お降りの音に霑ふ蛇の目傘  
初鴉そろそろ欲しき髪飾り  
春とよぶ序章に青さ搔き集む  
短所のみ似て切餅が膨れだす  
吹雪かれてふと青春の歌うかぶ

トバアズいろ 塩貝 朱千

深入りて雪韻まとふ森のカフエ  
白鳥にドラマはじめまる湖碧し  
白鳥の二羽に近づくと恋仇  
野水仙トバアズいろの香を放つ  
おもかげは水仙に似て恋しかり



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

奈良 沼田 巴字

雪明り蕘楷長者の堀の白

声出せば命の失せる冬の蝶

大雪や潤む灯火白き風

賀状書く一心不乱の友の顔

除夜の鐘きこえくるかに目を閉ちて

真白なる雪にも優る一枚の絵

餅つきのおうんの呼吸夫婦かな

晦日そば老舗も出せぬ味もあり

賀状受く励まし多くまた一年

初演奏ボーイソプラノ声澄みて

オハイオ 水谷 直子

京都 鈴鹿けい子

アリゾナ 伊吹 之博

福知山 西村 滋子

白砂を海となしけり福寿草  
吾を抱く母の姿の霜夜なる  
もう後のない落日や帰り花  
人は攻め人は老いけり草紅葉  
歳晩や磨き残しのある齡  
冬ざれて慕ひし影を見失ふ  
隠沼の枚を銜<sup>ばい</sup>みし寒の星  
当面はぬれ衣を着る枯蓮  
齊つむ真つ正面に若狭富士  
人の世に程よき重さ沢庵石

山稜の間近に見ゆる冬日和

札幌 野村 鞆枝

雨いつか雪になりたる港町

梅いまだ死のだんどりの少しずれ  
梅林のいちばん端は外反拇指

喧騒も汚れも消して雪霏霏と

冬あかね淑女二人のイタリアン

雪積むや類人猿の如く往く

未完の句左脳に消えて冬の虹

大白鳥羽ばたき揚る最上川

酒田 藤波 松山

鱒の群に釣人群れにけり

白菜と昼の太陽合体す

山茶花や見る人もなく咲きこぼれ

這ひ上る園児富士塚ふゆ晴るる

凜に落ちずに残る一葉かな

飴する湯桶の音や雪穂高

布川 孝子

クリスマス友導かれ受洗さる

渋川 東 秋茄子

十二月寂しいものは筆にぶる

銀杏散る追ひ掛けあうて駅広場

朝摘の七草がゆはやさしくて

写経する障子に走る落葉影

高野 春子

静寂は七日正月のあとになり

初暦巻き戻したる紙の反り

秋冷や蒼き湖上に白き水脈

さいたま 神田 惣介

蒼き空湖上に並ぶ牡蠣筏

葉先より滴の光り大旦

虎落笛病の友のメール読む

松戸 岡山 敦子

片言を話す孫来て三が日

実朝の海は困忌を修す

冬霧の川遡り明日を問ふ

千葉 伊藤 希眸

薄氷や眼の奥に万華鏡

花終小雨の道を素手で行く

顔に受く初雪よそこに住み慣れて

習志野 上野 紫泉

のつたりと着ぶくれの元数学者

柚子の香やほのほとならぬ恋をして

直江 裕子

問はるれば枯れには枯れの重さなど

山脈の頂にある初御空

食通の古代人とや七草粥